

App Bridge Monitor
Agent 監視サービス
Linux Agent インストールガイド

Ver. 1. 19. 0

目次

1. 本書の役割	1
2. 監視対象ノードの登録	2
3. Agent のインストール	5
3.1 Agent の前提条件、対象 OS.....	5
3.2 監視対象サーバへのログイン.....	5
3.3 セットアップファイルのダウンロード.....	5
3.4 インストール.....	5
3.5 初期設定.....	7
3.6 サービスの起動.....	10
3.7 自動起動の設定.....	11
3.8 Java コマンドパスの変更	12
3.9 動作確認.....	12
4. Agent のアンインストール	14
5. Agent のアップグレード	14
6. ノードの再設定	14
7. Linux Agent のサービス制御	15
7.1 サービス構成.....	15
7.2 サービス制御.....	15
8. Linux Agent のプロキシ設定	17
9. 監視項目、監視条件の変更	19

1. 本書の役割

本書は、App Bridge Monitor Linux Agent のインストール方法について説明するものです。

2. 監視対象ノードの登録

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じノード情報を共有します。このため既に App Bridge Kicker のノードとして登録されているサーバに App Bridge Monitor Agent をインストールする場合、本章の操作は不要です。

Linux Agent による Agent 監視サービスを実施するためには、監視対象サーバをノードとして登録します。本操作はユーザロール「EnterpriseAdmin」「NodeAdmin」のみが実施できます。

新しいノードを登録するには、App Bridge サイトにログインいただき、＜メインメニュー/ノード管理/ノード一覧＞の[ノード登録]ボタンをクリックします。

Menu > ノード一覧

ノードCD (前方一致) ☐ 解約済を表示

ノードCD	ノード名	種類	スケーリング制御
WS1	Windowsサーバ1号機	Windows (Amazon EC2)	☐

登録するノードの情報を入力します。入力が完了したら、[確認]ボタンをクリックします。

Menu > ノード一覧 > ノード登録

確認
キャンセル

ノード基本情報

ノードCD	
ノード名	
種類	--- ▼
スケーリング制御	☐

ノード基本情報は、利用者サーバの基本情報を登録するものです

- 本情報の登録により、App Bridge Monitor Agent、App Bridge Kicker Agentが利用可能となります
- App Bridge Monitor Agentをインストールしない限り、本情報を登録しても、Agent監視の課金は発生しません
- App Bridge Kicker Agentをインストールしない限り、本情報を登録しても、オーナノード課金は発生しません

ノード契約情報

統計保有日数(日)	--- ▼
応答監視エンドポイント上限数(件)	選択しない ▼
API監視	☐ 有効

ノード契約情報は、App Bridge Monitorの利用者サーバ監視設定であり、課金に影響するものです

- 統計保有日数は、Agent監視、応答監視の統計情報保有する日数であり、各監視の単価に影響します
- 応答監視は、申請ベースの課金であり、エンドポイント上限数を登録した時点から課金が発生します
- API監視は、申請ベースの課金であり、API監視を有効とした時点から課金が発生します

項目名称	設定内容	備考
ノード CD	監視対象ノードを一意に識別するためのノード CD を入力します。以降の処理には、このノード CD が必要です	(※1)
ノード名	任意のノード名を入力します	
種類	ノードの種類をプルダウンメニューから選択します	(※2)
スケーリング制御	AWS Auto Scaling など、サーバインスタンスを動的に増減させる場合チェックします	(※3)
統計保有日数 (日)	統計情報を保存する日数を選択します	
応答監視エンドポイント 上限数 (件)	応答監視 (Ping 監視、HTTP 監視、TCP ポート監視) のエンドポイント数を選択します。エンドポイント数は、監視したい Ping FQDN、HTTP URL、HTTPS URL、TCP FQDN とポート番号の合計です	(※4) (※6)
API 監視	API を利用したインスタンスのステータス監視を実施する場合、チェックします	(※5) (※6)

※1：先頭英字で半角英字、数字、アンダースコア、ハイフンで構成された 32 文字で指定します

※2：次ページ「種類の一覧」を参照下さい

※3：スケーリング制御の解説は「App Bridge Monitor ファーストステップガイド」を参照下さい

※4：「App Bridge Monitor 応答監視サービスガイド」を参照下さい

※5：「App Bridge Monitor API 監視サービスガイド」を参照下さい

※6：本画面で設定した時点から課金が発生します

種類の一覧は以下のとおりです。グレースアウトしている種類は本マニュアルの対象外です。

#	種類	内容	スケーリング制御
1	Windows (On-Premises)	Windows サーバ	選択可
2	Windows (Microsoft Azure Cloud Services)	Azure Cloud Services で稼働する Windows サーバ	必須
3	Windows (Microsoft Azure Virtual Machines)	Azure Virtual Machines で稼働する Windows サーバ	選択可
4	Windows (Amazon EC2)	Amazon Web Services で稼働する Windows サーバ	選択可
5	Linux (On-Premises)	Linux サーバ	選択可
6	Linux (Microsoft Azure Virtual Machines)	Azure Virtual Machines で稼働する Linux サーバ	選択可
7	Linux (Amazon EC2)	Amazon Web Services で稼働する Linux サーバ	選択可
8	Databases Host	Microsoft Azure、または Amazon RDS の SQL Server サービス	選択不可
9	Network Device	ネットワーク機器（ルータ、ファイアウォールなど）	選択不可

表示されたノード登録確認画面で入力した内容を確認し、「内容を確認しました」のチェックボックスにチェックを入れて、[決定]ボタンをクリックします。

Menu > ノード一覧 > ノード登録確認

☒ 内容を確認しました

ノードを登録する場合、「内容を確認しました」にチェックを付けて決定ボタンを押してください。

ノードCD	LX1
ノード名	Linuxサーバ1号機
種類	Linux(On-Premises)
スケーリング制御	☐
統計保有日数(日)	40
応答監視エンドポイント上限数(件)	選択しない
API監視	☐ 有効

これでノード登録は完了です。ご登録頂いたメールアドレスに「App Bridge 利用手続き完了通知（ノード登録完了）」が電子メールで送信されます。

3. Agent のインストール

3.1 Agent の前提条件、対象 OS

Linux Agent がサポートする環境、前提条件については、「App Bridge Agent サポートリスト」を参照下さい。

なお、App Bridge Kicker Linux Agent がインストールされている環境に App Bridge Monitor Linux Agent をインストールする場合、Agent のバージョンを同一にする必要があります。

3.2 監視対象サーバへのログイン

監視対象のサーバに root 権限を持つユーザでログインします。

3.3 セットアップファイルのダウンロード

以下の URL より、セットアップファイル (SetupABMLinux_v011900.tar.gz) をダウンロードします。

http://www.app-bridge.com/Setup_Monitor.html

3.4 インストール

(1) セットアップファイルの解凍

ダウンロードしたセットアップファイルを監視対象サーバ上の任意のフォルダに配置し、以下のコマンドで解凍して下さい。

コマンド

```
tar zxvf SetupABMLinux_v011900.tar.gz
```

解凍が完了すると、セットアップファイルと同じフォルダにインストールスクリプト(ucsinstall)が配置されます。

(2) パーミッションの変更

インストールスクリプトのパーミッションを変更します。

コマンド

```
chmod +x ucsinstall
```

(3) App Bridge Monitor Linux Agent のインストール

インストールスクリプトを実行し、App Bridge Monitor Linux Agent の必要ファイルをインストールします。

コマンド

```
./ucsinstall
```

実行例

```
# ./ucsinstall
Copying Files...
Install completed.
```

(4) 環境変数 PATH の更新

インストールが完了すると、環境変数 PATH に「/opt/ucs/bin」を追加するためのファイル (/etc/profile.d/ucs.sh) が配置されています。以下のコマンドを実行し、環境変数 PATH を更新して下さい。

コマンド

```
./etc/profile
```

※環境変数 PATH が更新されない場合は、一度ログインし直して下さい。

以上でインストールは完了です。引き続き「3.5 初期設定」に進んで下さい。

3.5 初期設定

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は初期設定情報を共有します。このため既に App Bridge Kicker Agent がインストールされているサーバに App Bridge Monitor Agent をインストールする場合、本節の操作は不要です。

(1) 設定ツールの起動

以下のコマンドを実行し、App Bridge Monitor Linux Agent の設定ツールを起動します。

※(2)以降は設定ツール内での操作となります。

コマンド

```
ucs-control.sh config
```

実行例

```
# ucs-control.sh config
Welcome to App Bridge Monitor ver 1.19.0.0 Configuration Tool.
Main>
```

(2) 環境設定ファイル(UCSDownload.ini)のダウンロード

環境設定ファイル(UCSDownload.ini)をダウンロードします。以下のコマンドを実行し、表示されるメッセージに従って「App Bridge 利用手続き完了通知」の内容を入力して下さい。

※入力を中止する場合は「¥¥」(バックスラッシュ 2 つ)を入力して下さい。

コマンド

```
Main> download
```

#	表示されるメッセージ	入力内容
1	Please input "FQDN" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	mercury.app-bridge.com を入力します
2	Please input "Port Number" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	443 を入力します
3	Please input "User CD" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	「App Bridge 利用手続き完了通知」の「ユーザ CD」を入力します (※1)
4	Please input "Password" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	「App Bridge 利用手続き完了通知」の「パスワード」を入力します
5	Please input "Owner CD" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	「App Bridge 利用手続き完了通知」の「オーナー CD」を入力します
6	Please input "Node CD" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).	監視対象サーバの「ノード CD」を入力します (※2)
7	Using proxy server for internet access? (yes/no)	プロキシサーバを使用する場合「yes」、使用しない場合「no」を入力します。「no」を入力した場合、#8 以降は表示されません
8	Please input FQDN of the proxy server.	プロキシサーバの FQDN (IP アドレス) を入力します
9	Please input port number of the proxy server.	プロキシサーバのポート番号を入力します
10	Please input user name for authentication. (If you don' t need, proceed next.)	プロキシ認証に使用するユーザ ID 入力します。ユーザ ID が不要の場合、未入力のままエンターキーを押下して下さい
11	Please input user password for authentication. (If you don' t need, proceed next.)	プロキシ認証に使用するパスワードを入力します。パスワードが不要の場合、未入力のままエンターキーを押下して下さい

※1: 指定するユーザアカウントには、ServiceAdmin 以上の権限が必要です。

※2: 「2. 監視対象ノードの登録」で登録したノード CD を指定します。

実行例

```
Main> download
Please input "FQDN" stated in App Bridge Notification Mail (Node Registration).
(中略)
Using proxy server for internet access? (yes/no)
download> yes
(中略)
Successfully downloaded "UCSDownload.ini".
```

環境設定ファイルの取得に成功した場合、上記のような成功メッセージ (Successfully downloaded "UCSDownload.ini".) が表示されます。

(3) 環境設定ファイル(UCSDownload.ini)の適用

ダウンロードした環境設定ファイルを App Bridge Monitor Linux Agent に適用します。以下のコマンドを実行して下さい。

コマンド

```
Main> install
```

実行例

```
Main> install  
Initial configuration completed.
```

以上で App Bridge Monitor Linux Agent の初期設定は完了です。

3.6 サービスの起動

App Bridge Monitor Linux Agent は以下のサービスで構成されています。

#	サービス名	概要	備考
1	ucswatchd	サーバを監視し、モニタデータ（※1）を作成します	使い方: start stop status
2	ucsagentd	モニタデータを監視サイトに送信します	使い方: start stop status
3	ucsconditiond	不要ファイル削除など、管理系処理を実施します	使い方: start stop status

※1: App Bridge Monitor Linux Agent が送信する監視データ

以下のコマンドにより、3 つのサービスをすべて起動します。（※各サービスは service コマンド、systemctl コマンド（systemd 環境の場合）からの起動も可能です。）

コマンド

```
ucs-control.sh start
```

実行例

```
# ucs-control.sh start
[ucswatchd]: Running
[ucsconditiond]: Running
[ucsagentd]: Running
```

3.7 自動起動の設定

サーバ起動時に自動的に App Bridge Monitor Linux Agent が起動するように設定します。本設定は必須ではありませんが、運用上、設定することを推奨しています。

(1) systemd 環境の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
systemctl enable ucswatchd.service
systemctl enable ucscconditiond.service
systemctl enable ucsagentd.service
```

(2) RedHat 系ディストリビューション（非 systemd 環境）の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
chkconfig --add ucswatchd
chkconfig --add ucscconditiond
chkconfig --add ucsagentd
```

※「chkconfig サービス名 on」でも可

(3) Debian 系ディストリビューション（非 systemd 環境）の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
update-rc.d ucswatchd defaults
update-rc.d ucscconditiond defaults
update-rc.d ucsagentd defaults
```

(4) SUSE 系ディストリビューション（非 systemd 環境）の場合

以下のコマンドで設定します。

コマンド

```
insserv ucswatchd ucscconditiond ucsagentd
```

3.8 Java コマンドパスの変更

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じ Java コマンド path 指定を共有します。このため既に App Bridge Kicker Agent がインストールされ、Java コマンド path が設定されているサーバでは、本節の操作は不要です。

Linux Agent は、デフォルトでは path が通っている java コマンドを使用して起動します。Linux Agent を path が通っている java とは異なるバージョンで起動したい場合、下記設定ファイルに java コマンドのパスを指定します。

設定ファイル	/etc/opt/ucs/ucsconfig.ini
設定キーワード	[JavaCommandPath]

設定例

```
[JavaCommandPath]
/usr/lib/jvm/java-1.8.0-amazon-corretto/jre/bin
```

上記の設定例は、path が通っていない Amazon Corretto 8 を、Linux Agent の実行に利用する際の設定例です。

3.9 動作確認

監視対象サーバの状態を確認するには、＜メインメニュー/監視照会/ノード一覧＞のステータスを確認します。対象サーバのステータスが「Unknown」以外であれば、監視されています。サーバ状態の詳細を確認する場合は、ノード CD をクリックします。

Menu > ノード一覧						
ステータス すべて		☐ 解約済を表示				
ノードCD(前方一致検索)				表示内容を更新		
ノードCD	ノード名	種類	スケーリング	ステータス	ハートビート日時	
CS1	CloudServices1号	Windows(Microsoft A: 0		Unknown	2017-03-08 16:54:43	
LX1	Linuxサーバ1号機	Linux(On-Premises)	-	Unknown	2017-03-07 11:15:41	
VM1	Azure Virtual Ma	Windows(Microsoft A: -		Unknown	not occurred	
WS1	Windowsサーバ1号	Windows(Amazon EC2)	-	Good	2017-03-08 15:04:54	

監視対象サーバの詳細情報が表示されます。統計情報を確認するには、該当のアイコンをクリックします。

Menu > ノード一覧 > ノード詳細



ノードID: LX1

種類: Linux(On-Premises)

ノード名: Linuxサーバ1号機

ハートビート日時: 2017-03-06 17:21:43

OS情報: Linux/amd64/4.4.11-23.53.amzn1.x86_64

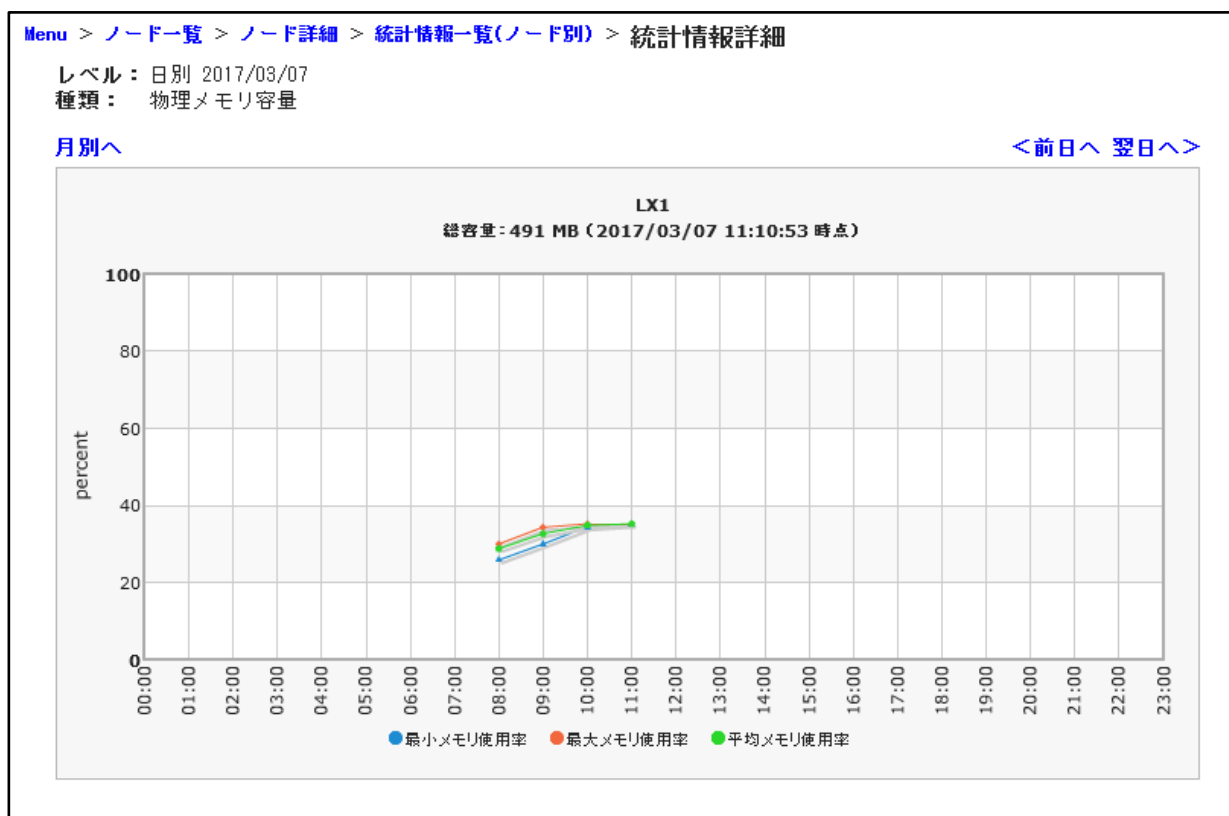
Agentバージョン: 1.11.0.0

ステータス一覧

種類: すべて ステータス: すべて 表示内容を更新

種類	キー	値	ステータス	データ更新日時
CPUビジー	0	ビジー率: 1.870003 %	Good	2017-03-06 17:17:02
物理メモリ容量		空き容量: 333 MB / 491 MB	Good	2017-03-06 17:16:02
ディスクビジー	xvda	ビジー率: 0.27 %	Good	2017-03-06 17:17:02
ディスク容量	/dev/xvda1	空き容量: 6.68 GB / 7.65 GB	Good	2017-03-06 17:16:02
サービス	ucsagentd	ステータス: Running	Good	2017-03-06 17:21:43
サービス	ucscollectiond	ステータス: Running	Good	2017-03-06 17:21:43
サービス	ucswatchd	ステータス: Running	Good	2017-03-06 17:21:43

統計情報が表示されます。



4. Agent のアンインストール

アンインストール用スクリプト (/opt/ucs/bin/ucsuninstall) を実行することで App Bridge Monitor Linux Agent をアンインストールできます。

アンインストール後は、以下のフォルダが監視対象サーバから削除されずに残り、App Bridge Monitor Linux Agent を再度インストールしたときに監視設定を引き継ぐことができます。

残るフォルダ	役割
/etc/opt/ucs	App Bridge Monitor Linux Agent 管理ファイルの配置フォルダ
/opt/ucs/ini	App Bridge Monitor Linux Agent 設定ファイルの配置フォルダ
/var/log/ucs	App Bridge Monitor Linux Agent のログ出力先

実行例

```
# ucsuninstall
Uninstall App Bridge Monitor? (y/n)          (アンインストール確認)
y
Uninstalling...
[ucsagentd]: Stopped
[ucsconditiond]: Stopped
[ucswatchd]: Stopped
Uninstalled App Bridge Monitor.
```

5. Agent のアップグレード

Linux Agent を監視対象サーバからアンインストールし、新しいバージョンをインストールすることで Linux Agent のアップグレードができます。

ダウングレード（古いバージョンのインストール）は保証していません。

6. ノードの再設定

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じノード情報を共有します。このため既に App Bridge Kicker Agent がインストールされているサーバでノードの再設定を行った場合、App Bridge Kicker Agent についてもノードの再設定が行われます。

インストールしている Agent を異なるノードに再設定する場合、「3.5 初期設定」に従い、設定ツールを起動し、初期設定を再実行して下さい。

なお、異なるノードに変更した場合、各種監視設定は維持されます。

7. Linux Agent のサービス制御

7.1 サービス構成

App Bridge Monitor Linux Agent は以下のサービスで構成されています。

#	サービス名	概要	備考
1	ucswatchd	サーバを監視し、モニタデータ（※1）を作成します	
2	ucsagentd	モニタデータを監視サイトに送信します	
3	ucsconditiond	不要ファイル削除など、管理系処理を実施します	

※1: App Bridge Monitor Linux Agent が送信する監視データ

7.2 サービス制御

Agent サービスの操作方法を以下に示します。

(1) service コマンドによる実行（非 systemd 環境：SysVinit/Upstart）

以下のコマンドを実行します。サービス名には「ucswatchd」「ucsagentd」「ucsconditiond」のいずれかを指定し、コマンド引数には「start」「stop」「status」のいずれかを指定します。

コマンド

```
service <サービス名> <コマンド引数>
```

実行例

```
# service ucswatchd start
[ucswatchd]: Running
```

上記の実行例では、App Bridge Monitor サービスのうち、「ucswatchd」を起動しています。

(2) systemctl コマンドによる実行 (systemd 環境)

以下のコマンドを実行します。サービス名には「ucswatchd」「ucsagentd」「ucsconditiond」のいずれかを指定し、コマンド引数には「start」「stop」「status」のいずれかを指定します。

コマンド

```
systemctl <コマンド引数> <サービス名>.service
```

実行例

```
# systemctl start ucswatchd.service  
[ucswatchd]: Running
```

上記の実行例では、App Bridge Monitor サービスのうち、「ucswatchd」を起動しています。

(3) 設定コマンドによる実行

App Bridge Monitor Linux Agent では、各種設定を変更するための設定コマンド(/opt/ucs/bin/ucs-control.sh)を提供しています。設定ツールを以下の引数で実行することで、App Bridge Monitor サービスを操作することができます。

コマンド

```
ucs-control.sh <コマンド引数> <サービス名>
```

コマンド引数には「start」「stop」「status」のいずれかを指定し、サービス名には「ucswatchd」「ucsagentd」「ucsconditiond」のいずれかを指定します。実行結果は同じ引数とサービス名の組み合わせで(1)または(2)を実行した場合と同様です。サービス名を指定しない場合、上記サービスすべてに対してコマンド引数で指定した操作が実行されます。

8. Linux Agent のプロキシ設定

App Bridge Monitor と App Bridge Kicker は同じプロキシ設定を共有します。このため既に App Bridge Kicker Agent がインストールされ、プロキシが設定されているサーバでは、本章の操作は不要です。

App Bridge Monitor Linux Agent が使用するプロキシ情報を設定します。監視対象サーバからのインターネット接続にプロキシを使用している場合に設定して下さい。

(1) 設定ツールの起動

設定ツールを起動します。(起動方法は、「3.5 初期設定」の(1)を参照してください)

(2) プロキシ設定モードへ移行

設定ツールの起動時のモードであるメインモードで以下のコマンドを実行し、プロキシ設定モードへ移行します。

コマンド

```
Main> proxy
```

(3) プロキシ設定の変更

設定ツールのプロキシ設定モードで以下のコマンドを実行し、メッセージに従って設定項目を入力します。

コマンド

```
Proxy> edit
```

入力順	内容	備考
1	プロキシサーバの FQDN (IP アドレス)	
2	プロキシサーバのポート番号	
3	プロキシ認証に使用するユーザ ID	不要の場合、未入力のままエンターキーを押す
4	プロキシ認証に使用するパスワード	不要の場合、未入力のままエンターキーを押す

実行例

```
Proxy> edit
Please input FQDN of the proxy server.
edit> sampleproxy.co.jp
Please input port number of the proxy server.
edit> 8080
Please input user name for authentication. (If you don't need, proceed next.)
edit> proxyUser
Please input user password for authentication. (If you don't need, proceed next.)

Changed proxy server settings.
```

※ 入力されたパスワードの内容は表示されません。

9. 監視項目、監視条件の変更

Agent 監視サービスの監視設定は、Agent での対象項目設定と Web サイトでのエラー判定条件に分かれています。主な設定内容は以下のとおりです。

監視項目	Agent 監視対象設定 (※1)	Web サイトエラー判定条件 (※2)	備考
テキストログ監視	監視対象のテキストログを指定します	エラーとする条件（フォルダパス、ファイル名、ファイルの説明、ログの内容）を指定します	※3 ※4
サービス監視	監視対象のサービスを指定します。App Bridge 関連のサービスは強制的に監視対象となります	—	
プロセス監視	監視対象のプロセスを指定します	プロセス数の下限、上限を指定します	※4
CPU ビジー監視	監視対象 CPU を指定します。デフォルトで、全ての CPU が対象となります	CPU ビジーの上限、上限超過経過時間を指定します	※4
ディスクビジー監視	監視対象のディスク装置を指定します。デフォルトで全ディスク装置が対象となります	ディスクビジーの上限、上限超過経過時間を指定します	※4
ディスク容量監視	監視対象のドライブを指定します。デフォルトでルート (/) にマウントされたファイルシステムが対象となります	空き容量の下限（バイト数、パーセント）を指定します	※4
物理メモリ監視	デフォルトで監視対象です	空き容量の下限（バイト数、パーセント）、下限超過制限時間を指定します	
仮想メモリ監視	デフォルトで監視対象です	空き容量の下限（バイト数、パーセント）、下限超過制限時間を指定します	※4

※1：詳細は、App Bridge Monitor Agent 監視サービス Linux Agent 設定ガイドを参照願います

※2：詳細は、App Bridge Monitor Agent 監視サービス エラー判定条件ガイドを参照願います

※3：Web サイトで設定したエラー条件に該当し、且つ除外エラー条件に該当しないデータのみが監視サイトに送信されます

※4：監視条件には、初期値が設定されています。詳細は、App Bridge Monitor Agent 監視サービス エラー判定条件ガイドを参照願います